

【研究ノート】

『感性学』の周辺

～自己への「気付き」を顕在化する授業の構築～

平嶋 一臣

Circumference of KANSEI study

~How to Constraction of Lesson Notice Oneself~

by

Kazuomi HIRASHIMA

キーワード：感性 感性学 感性教育 気付き

はじめに

「感性」の重要性が、最近頃に喧伝されているが、高等教育機関に「感性学」講座の存在が薄い⁽¹⁾。「感性」を「直感」「感覚」「感情」のような、一見心理・生理学的な研究分野と捉え、具体的・現象的な研究の世界から遠ざけているように思われる。かつて私が調査した学校現場でも、「感性」を意識して授業に取り組んでいる教師は少なかった⁽²⁾。

「感性」の世界、「感性教育」の場は、我々の周囲に満ち満ちている。

「感性」は、行動・情熱の源であり、具体的な行動への指針をも決定づける。ところが、それにしても教育現場での取り組みは乏しいままである。これは、指導者がその「感性」の大切さ・意義を知り、この気付きをタイミングよく実践できていないためではないだろうか。

指導者における「気付き」はすなわち「感性教育」に向ける力量ではないかと考えている。

「感性を哲学していると、世の中のあらゆる出来事が気になって仕方がない」⁽³⁾ 私の感性学（哲学・美学）の方向はそこに在り、また、そこ以外にはない。

本論は、以上のことを背景に、「感性」の学びをどのように紡ぎ編んでいくのか、本学学生への授業を通して得た幾つかのデータを集約分析しつつ、「感性（学）」へのアプローチを試みたものである。

弾力に富む思考力旺盛な本学学生が、自らの豊かな「感性」を駆使し、『感性学』に、日々挑んでいる。その積み重ねの道程で、己が人生観・人間観を掴んでいく姿を、具体的な言動で伝えている。ここに挙げた授業⁽⁴⁾の取り組みは、私にとって未だ手探りの段階である。本論を「研究ノート」とし、主題を『感性学の周辺』とした所以である。

受理日：平成 29 年 11 月 30 日

純真短期大学こども学科特任教授

1 シラバス中の「感性」を意識した授業

この節のタイトルには幾らかの補足が必要である。それは「感性」を意識した部分である。前述のように、私は毎回の授業の中で、「感性」「感性育て」を意識しないことは無かった。

若さ溢れる学生は、その感受性の敏感さ・柔らかさで、常に「感性」を磨いている。教師は、この「感性」育てのきっかけ作りあるいは支援をしているにすぎない。授業者（教師）の感性磨きを意識した教材の準備と授業の組立とが求められる。

そこで、私が授業の中で意識した「感性」磨き部分との絡みについて、以下の①②③の授業方法と授業結果を報告する。いずれも、学生の反応の、比較的言葉として表出しやすいと判断した授業を中心に紹介する。この節のタイトルに「意識した」の語を使っていることは、このような理由からである。

① 感覚協働法、再度の分析(前回の補足)

感覚を協働させ、学生の感情を誘発し、その総合を感性に繋げ、これを前頭葉の活動の一端である言葉（言語）につなげる方法については前回の論文で述べた⁽⁵⁾。今年度は、これを短期大学の『文章表現法』で採り上げた。名画を見ると同時に音楽を聴き、自然発生的に感じたムードを文章化する試みである⁽⁶⁾。その結果、学生はどのような「気づき」があったのだろうか。

前回の論文では、出来上がった文章（ショートショート）に重きを置いたが、今回は「何故我々の脳の中でこんなことが起きるのか？」実感を伴った脳内の変化を学生がどのように考えたのかを中心に論じていく。事前に一つだけ加えたことがある。それは、絵を見ながら同時に音楽を聴かされると、自分の文章化作業に効果的なのか、それとも反対に想像力・創作力を削いでしまうのか、ということである。

〈感覚協働法・短期大学1年生の「気づき」〉（いずれも一部分）

- A 子・・・目から得る情報だけでなく、耳から得られる情報も加わると、絵に関する捉え方が変わってきた。五感をすべて使えば、他にももっといろいろなことが浮かんできそうだ。
- B 子・・・人間は視覚だけの情報で感じ取れることと、視覚・聴覚どちらからも感じ取れることには大きな違いがあると思った。音楽によって絵の中の情景が全く違ったものに見えてきた。私は音楽があるほうが情景を浮かべやすかった。
- C 子・・・目で感じた時と、耳と目を合わせて感じた時とはストーリーが違って、人間の面白さを知った。音楽が変わると絵の見方が変わることを知って興味深かった。私としては、モジリアーニさんは、後の曲（マイナー調の暗く悲しい音楽＝筆者）のつもりで描いたのだと思っている。
- D 子・・・耳から入るメロディーとトーンによって、絵のテンションが違って見えた。何も曲がかかっていないときには、あまりストーリーが浮かんできませんでした。

- E 子・・・1枚の絵に音を付けて見ると、明るい曲調の時はどこかしら女性の表情はほほ笑んで見え、背景のグレーも柔らかく落ち着いたイメージになります。しかし、次の暗い曲になると女性の表情は一変し、寂しげに見え背景もどんよりとしたグレーの重々しい場面を感じました。それだけ、聴覚からのイメージで見ている者が支配されるものかと不思議になります。人間は面白いなど感じました。
- F 子・・・SNSの会話もそうだが、人の表情、声のトーンが分からないと、本当の相手の気持ちが分からないし伝わらない。
- G 子・・・視覚から受けた密やかな情景は変わらないが、聴覚からの刺激により、その背景（理由）が変化した。初めの曲は長調の爽やかな空気が加わり、一抹の不安が加味されるが、後の曲ではレクイエムのような重さを感じた。
- H 子・・・一枚の絵を見て物語を作り出すのは時間がかかったが、これに音楽が加わると絵の光景が思い浮かべやすくなり、すらすらと書くことができた。このお話作りで分かったことは、視覚だけで情報を得るよりも、聴覚からも情報を得たほうが感受性も豊かになり物語が浮かぶということだ。
- I 子・・・私は、このお話作りを通して、音楽が無く絵だけだと想像する幅が広く自由な想像をふくらませることができる。音楽が加わることで雰囲気が変わり想像する幅が狭くなりイメージが固定されてしまった。
- J 子・・・私は、音楽が有ったほうが、ストーリーが浮かびやすいです。最初の曲は、少し楽しげでルンルンした雰囲気です。後の曲はどこか悲しい場面に聞こえます。モジリアーニさんは明るい気持ちでこの絵を描いたと思います。なぜなら、この曲の時には女性の口元が少し笑って見え、赤ちゃんを大事そうに抱っこして見つめているからです。
- K 子・・・音楽が無いほうがストーリーを組み立てやすかった。曲が入ると、絵を描いた人がどんな思いで描いたのかを想像できる楽しさが広がることは分かった。

今年度、『文章表現法』の受講者は、2学科合わせて88名である。その学生の中で、「音楽が無いほうが、ストーリーが浮かびやすい、と答えた学生は、ここに挙げているI子・K子のわずか2名であった⁽⁷⁾。このことから、複数の感覚刺激は、何らかの状態を我々の頭の中に作り上げ感情を揺さぶり感性の周辺へと導く一筋のルートの存在を暗示している。「この感情の揺さぶり」が、より高次の段階と考えている「感性」へと導かれるルートの解明については、現時点で私は断言できない。今は、上記学生の文中に示したアンダーラインの部分にその糸口を感じているというだけに留めておく。

② 準感覚協働法の試みを「感性」へ

ここでは、純真高校看護専攻科・『感性哲学(美学)』⁽⁸⁾、純真短期大学・『文章表現法』⁽⁹⁾の授業および中村学園大学児童教育学科3年生対象の・『教育はロマン』と題した講演会⁽¹⁰⁾で行った準感覚協働法⁽¹¹⁾の試みについて述べる。学生の反応を分析しつつ、言葉から顕れてくる「感性」の周辺に向かう姿を紹介する。

今回、準感覚協働法を行うにあたって、教材として使用したのは、詩が宮沢賢治作『永

訣の朝』(前半部)、音楽がショパンの『プレリュード』26曲中の5曲である。かつて、故・石井義武は、基本的に7曲を選び試みた⁽¹²⁾。ここでは、学生の人数がやや少なく、共通の音楽を選択する可能性が高く、後でのグループ化も行い易いと考え、5曲に絞った。

次に、準感覚協働法の手順について、その概略を紹介する。

- (1) 宮澤賢治作『永訣の朝』を黙読する。読むスピードは各自に任せる
- (2) 黙読し、賢治の妹とし子(本名はトシ)について補足説明し、当時の状況のある程度掴むことが出来たところで次に移る。
- (3) ショパンの『プレリュード』5曲(初めから順にA・B・C・D・Eとする)を流すことを伝える。今回使用の5曲は次の通り(学生には曲目の説明は一切なし)。
 - A……『プレリュード』12番
 - B……『プレリュード』19番
 - C……『プレリュード』17番
 - D……『プレリュード』4番
 - E……『プレリュード』8番
- (4) 5つの曲を、それぞれ順に40秒ほど流し、これに自分のスピードで『永訣の朝』の朗読を被せるので、詩との親和性を4段階で記録することを伝える。
- (5) 4段階は、◎・○・△・×とし、意味を次のように約束する。
 - ◎……ぴったり合う
 - ……合いそうだ
 - △……合いそうにない
 - ×……まったく合わない

この印を、『永訣の朝』を黙読しつつ、気付いたら時点で直ちに記録することを伝える。尚、◎が2個以上×が2個以上など、同じレベルに感じる曲があれば、同じのものがいくつあっても構わないことも知らせておく。
- (6) 5曲全部を聴き終わった後、最も親和性を感じる1つの曲を選ぶ(◎が2つ以上となることもあり得るから)。

〈準感覚協働法の結果〉

(括弧内の数字は人数。「親和度」は、◎を2点、○を1点、△を-1点、×を-2点で計算)

◎純真高校看護専攻科1年生 34名

・曲Aとの親和性……◎(2)	○(8)	△(11)	×(30)	親和度…-31
・曲Bとの親和性……◎(18)	○(8)	△(12)	×(14)	親和度…±0
・曲Cとの親和性……◎(10)	○(12)	△(11)	×(14)	親和度…-3
・曲Dとの親和性……◎(34)	○(13)	△(4)	×(2)	親和度……41
・曲Eとの親和性……◎(8)	○(10)	△(8)	×(26)	親和度…-16

◎純真短期大学食物栄養学科1年生 34名

・曲Aとの親和性……◎(1)	○(6)	△(16)	×(11)	親和度…-30
・曲Bとの親和性……◎(1)	○(11)	△(13)	×(9)	親和度…-18

- ・曲 C との親和性……◎ (4) ○ (11) △ (12) × (7) 親和度…- 7
- ・曲 D との親和性……◎ (10) ○ (17) △ (4) × (6) 親和度……27
- ・曲 E との親和性……◎ (5) ○ (11) △ (11) × (7) 親和度…- 4

◎純真短期大学こども学科 1 年生 37 名

- ・曲 A との親和性……◎ (1) ○ (10) △ (17) × (18) 親和度…- 23
- ・曲 B との親和性……◎ (3) ○ (12) △ (11) × (11) 親和度…- 15
- ・曲 C との親和性……◎ (3) ○ (12) △ (10) × (11) 親和度…- 14
- ・曲 D との親和性……◎ (20) ○ (9) △ (5) × (3) 親和度……38
- ・曲 E との親和性……◎ (1) ○ (18) △ (11) × (7) 親和度…- 5

◎中村学園大学児童教育学科3年生 127 名

- ・曲 A との親和性……◎ (2) ○ (20) △ (44) × (61) 親和度…- 142
- ・曲 B との親和性……◎ (4) ○ (34) △ (50) × (39) 親和度…- 86
- ・曲 C との親和性……◎ (9) ○ (32) △ (46) × (37) 親和度…- 70
- ・曲 D との親和性……◎ (76) ○ (33) △ (12) × (6) 親和度……161
- ・曲 E との親和性……◎ (9) ○ (42) △ (41) × (35) 親和度…- 51

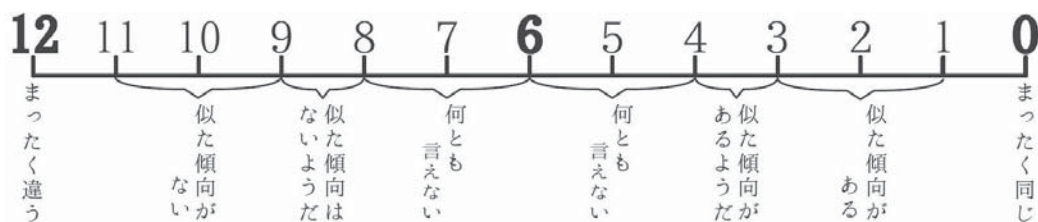
〈3学校4グループの相関を見る〉 (数字は親和度の列位)

	曲 A	曲 B	曲 C	曲 D	曲 E
看護専攻	5	2	3	1	4
食物栄養	4	5	3	1	2
こども	5	4	3	1	2
児童教育	5	4	3	1	2

この列位を『平均偏差』で示すと、4グループの相関関係が、次のように見えてくる。

- ・食物栄養学科と初等教育学科の平均偏差は 2 (ほぼ似ている)
- ・看護専攻科と食物栄養学科の平均偏差は 6 (どちらとも言えない)
- ・看護専攻科と児童教育学科の平均偏差は 4 (やや似た傾向がある)
- ・こども学科と児童教育学科の平均偏差は 0 (全く似ている)
- ・こども学科と食物栄養学科の平均偏差は 2 (ほぼ似ている)
- ・こども学科と看護専攻科の平均偏差は 4 (やや似た傾向がある)

なお、グループ間の偏差を調べる対象が今回のように5つの場合、平均偏差表は次のようになる。



この結果から言えることは、4グループとも共通して賢治の『永訣の朝』の朗読に被せる曲として、プレリュード中のDの曲（4番）が合っていると感じている者が多いということである。もちろん、そうであっても中には、Dの曲を朗読詩には「全く合わない」と感じている者も、231名中17名はいるわけで、このことも、授業者は尊重することを怠ってはならない。ここでは、そのように感じる何かが存在する、という事実を静かに納得する以外にはない。

上記中、平均偏差が6であった、看護専攻科34名と食物栄養学科34名の両グループは、準感覚協働法の結果だけからみれば、学級集団としてさほど似た雰囲気にはなく、反対にこども学科と初等教育学科は、グループ全体の雰囲気がかなり似ていることが分かる。いや、「分かる」というよりも「想像できる」と言ったほうが正確だろう。「想像」という語を使ったように、実はこの準感覚協働法では、その辺りまでしか知ることはできないのだ。とは言え、「言葉プラス音楽」といった抽象（言語）的な世界と感覚（ここでは聴覚）的な世界を、同時並行して学習を進めていくことで、学生は何かしらの感覚および感性の周辺にたどり着こうとしている事実が在るということを体得していることだ。そのことは、実験後に学生から提出された「気づきノート」の中の文言もいくらかの支えになるであろう。

〈学生がそれぞれの曲を選んだ理由〉

◎Aの曲を選んだ学生

- ・この詩は、今日の内に妹が死んでしまうという悲しい詩だ。しかし、賢治はこの詩で力強く生きていくことを誓っている。妹の分まで生きていこうという詩だから、この強弱のはっきりした曲を選んだ。

◎Bの曲を選んだ学生

- ・この曲のテンポが読んでいて合っている。
- ・「みぞれがふっておもてはへんにあかるいのだ」という部分に当てはまる、ちょっと奇妙な言葉と曲が合ったから。
- ・とし子が死んでしまう悲しみを感じながらも、妹への愛おしさや感謝の気持ちが、入り交じった音に聞こえてきた。
- ・賢治が、前を向いて生きていこうとしている姿が想像できる。悲しみの中の決意が目に見える気がした。
- ・「ああとし子死ぬという今頃になって・・・」からが、この曲にぴったりと重なり、合い始めた。
- ・この曲では、悲しさの中の希望が湧くようなメロディーだから、ぴったりと合った。

- ・前向きに生きていく感じが伝わってきた。グレゴリア聖歌のように、悲しみながらも安らかに眠って欲しいと願っている感じがした。

◎Cの曲を選んだ学生

- ・ゆっくりとした時間の流れが賢治のこの詩に合っているから。
- ・強めの音と軽めの音とがあり、読んでいてとても合っていた
- ・全体的に穏やかで妹が安らかに亡くなっていく様子に合っている。妹の最後の願いを叶えてあげた感じが伝わってきたから。
- ・初めに黙読した時、自分のイメージが決まっていた。だが、聴いている内に他の気持ちも浮かんできた。死ぬ直前の兄と妹の優しい雰囲気がこの曲に感じられた。
- ・綺麗で滑らかで、落ち着いた雰囲気の曲が詩に合っている
- ・優しいメロディーの中に、強くなる部分もあり、気持ちの強弱があるところも自分はぴったりだと感じた。

◎Dの曲を選んだ学生

- ・自分が描いている情景にぴったりのメロディーだった。
- ・長調より短調の方が合う。この曲は、ゆっくりとしている中にも少し鋭い部分もあり、悲しみの中あめゆきを取ろうと飛び出す賢治の様子と妹にこれまでの感謝の気持ちが表れている。
- ・最後まで自分のちょうど良いペースで、音楽に合わせて読めた。
- ・この曲は、一定のメロディーが背景にあり、それが今降っているみぞれを表しているように感じた。
- ・しみりとした感じがこの詩に合っている。
- ・詩と曲がぴったりと重なり合、私自身が泣きそうになったから。
- ・詩から伝わる深い悲しみが静かに伝わってくる。この曲以外の曲は速すぎて慌てていたり、苦しみ・暴れていたりして、D以外の曲では、テンポが速すぎて動のイメージが強い。
- ・穏やかな曲の中に、亡くなるときの寂しさや、焦りが見えた。ゆっくりと流れる時間の中に、亡くなるというタイムリミットが近づいていることを感じた。
- ・詩にこの音楽を重ねると、その詩の中のイメージが湧いてくる。
- ・この曲は、賢治の詩を読んでいて気にならない（邪魔しない）。

◎Eの曲を選んだ学生

- ・賢治の詩は、ただ悲しいだけではなく希望も描かれており、少し明るさのあるこの曲が合う。
- ・妹のために一生懸命な兄の姿が浮かんだ。
- ・妹の健気な願いを少しでも叶えてあげようと、急ぐ賢治の心を表しているかのような、不安な気持ちになるこの曲がとても合っている。
- ・妹との別れが近づいてきており、辛い賢治が、前に進もうという意志があるので、暗

い曲想の中にも踏ん張るような気になれるから。

- ・「くらいみぞれのなか」という場面が、この曲によく合っていた。
- ・死ぬ間際なので、感情の起伏が激しいと思う。この曲は、とても音域が広く、人間の感情のようだった。

以上のような言葉で、感覚の協働の親和性を語ってくれた。中には「何となく…」といった理由(?)も少なくなかった。この「何となく…」の裏に隠されているものこそ感覚・感性の周辺にたどり着こうとしている学生の姿と言えるかもしれない。言葉（ここでは賢治の詩）を聴覚と協働させようとする試みであるだけに、学生の「気付きノート」の内容について、レベルに引き上げる術を、指導者（ここでは私）が追及していかなければ次の展開は生まれない。準感覚協働法について、今後さらに研究を続けていきたい。

③ 『感性哲学』授業のまとめ

～これまでの学びのまとめとして『私の哲学』を発表する～

純真高校看護専攻科では、『感性哲学』を授業している。この授業では、具体的な感覚刺激が我々人間をさまざまな思考および過程・思考の方向を決定づけることを学生に学んで欲しいと願っている。

それと同時に、看護師がなぜ「士」ではなく「師」が付いているのかという基本的な姿も求めている。直接人間に触れ合いながら、(鋭い五感を働かせつつ)感性豊かな仕事、将来の仕事には求められていることを学んでほしいと15コマの授業を行っている⁽¹³⁾。その15回の「まとめ」にあたり、学生は「感性哲学」を学び、どのような自分の座右の銘(格言)を自作したのか発表してもらった。以下は、その時(授業最終日)に発表した学生自作の格言である(平成28年度37名)。

- 1 何十手先を考えるのではない。何手先を何百通り考えるかだ (A 男)
- 2 忘れたい時ほどすぐ思い浮かび、思い出したいものほど忘れていく (B 子)
- 3 一年があつという間に感じるのは、何気ない毎日が充実しているということ (C 子)
- 4 人は見返りを求める。しかし、それが世の中をつくる (D 子)
- 5 人に親切にしたぶん自分に余裕ができる。相手にとってありがた迷惑な場合もあるが (E 子)
- 6 人生は欲でできている (F 子)
- 7 見方によって判断は変わる (G 子)
- 8 努力する人は目標を語り、怠ける人は不満を語る (H 子)
- 9 悲しい事も嫌な事もある。今日は今日、明日は明日、寝たら忘れること (I 子)
- 10 勝ちたいならやりなさい。負けてもいいのならやめなさい (J 子)
- 11 人間、箒は使いたがるけど雑巾は使いたがらない (K 子)
- 12 欲があつて良いじゃないか。それが人間だから (L 子)
- 13 人は本当に悪なのか。人を悪だと言いきれる人こそ本当の悪ではないか (M 子)
- 14 性格は、似ている人ほど気が合わないものだ (N 子)

- 15 してあげたと自慢げに話す、それは醜さの塊でしかない (O 子)
- 16 考えるな、感じろ。しかし、感じ取るだけの知性も必要である (P 子)
- 17 人が亡くなると、ようやくみんなが集まり感謝するようだ。「これまで本当にありがとう」と (Q 子)
- 18 イルミネーションって、一人で見るとただの豆電球にしか見えないもの (R 子)
- 19 見返りを求める優しさは本当の優しさと言えるのか (S 子)
- 20 決意はしても続かないのなら、初めからしないことだ (T 子)
- 21 相手の気持ちに立った時、その気持ちを自分の中で忘れてはいけない (U 子)
- 22 私や他人がどんな人間なのかは、今その人の周りにいる人で分かるはずだ (V 子)
- 23 一つのリンゴ。使う人によって幸せになる人不幸になる人、様々だ (W 子)
- 24 くやしい顔 泣き顔 後悔した顔とさよならするために「顔晴れ！頑張れ！」(X 子)
- 25 嫌なこと、ムカついたことはすべて、「まっいいか！」と笑ってやろう (Y 子)
- 26 悪いことをして隠していても心の足跡は嘘をつかない (Z 子)
- 27 頑張った分、今日も続く食のごほうび (A 子)
- 28 自分に自信がある人程失敗する (B 子)
- 29 身近にいる人ほど案外傷つけているかもしれないよ (C 子)
- 30 一瞬だけでいい、人のための支えであったり笑顔にさせたりする人でありたい (D 子)
- 31 出来るか出来ないかではなく、やるかやらないかである (E 男)
- 32 幸せを願えたら、きっと、ずっと一生もの (F 子)
- 33 今までがあるからこそ、これからがある (G 子)
- 34 お腹がペコペコな時は何でも美味しいものだ (H 子)
- 35 「わかるよ」、この言葉は嘘である。人の気持ちは簡単には分からない (I 子)
- 36 悪いことは続く、良いことは連鎖する (J 子)
- 37 自分の話ほど気持ちのいいものはない。自分の話ほど聞いていてつまらないものはない (K 子)

「哲学」をすれば、結局人間（世界）が恋しくなる、人間の生きざまが恋しくなる。専攻科学生の 37 個のつぶやきの中から、そのことが私に伝わってくる。この言葉の背景には、さまざまの具体的な生まれて 18～19 年間の人生模様が詰まっているのだろう。

昨年度、15 回の授業を終えた後、「どんなひと言を思いついたか、何でも呟いてごらん」と問いかけると、学生は上記の言葉を呟いた（書いた）。今改めてこれらの語録を読み直してみると、それぞれ、しっかりと自分なりの人生（世界）を哲学し始めている様子がうかがえる。頼もしい限りである。

とは言え、これはあくまでも言葉の世界にすぎない。人間の最下層感覚・下層感覚・脳辺縁系・脳新皮質までの充実の上に構築された言葉群なのか、プラトンの言う「哲人」でもない我々に断定できるわけでもない。今はひたすら希望としての教育の姿を信じて突き進む以外にはないのである。

願わくば、ここに挙げた、37 個の処世訓とも人間訓とも言える一語一語を、学生が自分の存在位置にしっかりと立ち、これからの長い人生の礎になる言語として息づいていくこ

とを祈るのみである。

2 再び、「感性」「感性教育」「感性哲学（美学）」について

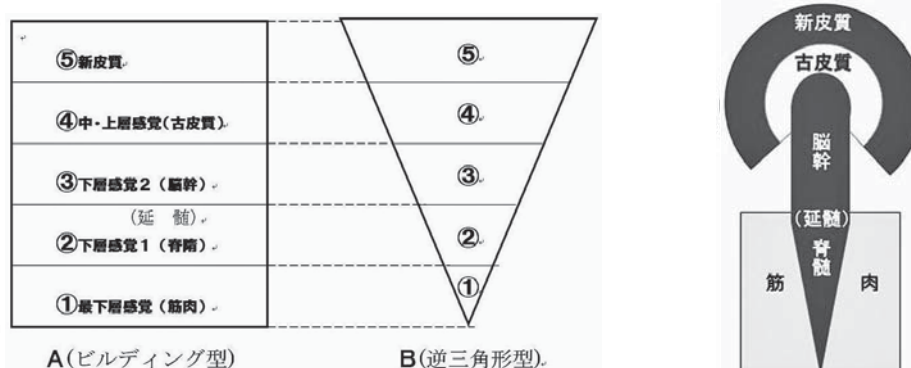
(1) 「感性」の定義

⑬「感性」とは、ヒトの持つ最下層感覚・下層感覚・中層感覚さらに上層感覚を段階的に充実させ、その総合力により、外界をより確かに感じ取る自分に気付くこと

また、これをさらに凝縮すれば、

「感性」とは「気付き」である

と考える。「気付く」人間、「気付く」教師、「気付く」看護師、「気付く」社会人になってほしい。



脳の重層的構造 (右図は時実利彦著『脳と人間』より一部を平嶋が加筆)

人間の脳は、上右図のように、下層から脳幹→古皮質→新皮質といった何層もの構造になっている。私はこれらのさらに下層にある「脊髄」さらに下層に「筋肉」（原始的脳＝筋紡錘感覚）を想定している。これら5層が、A（ビルディング型）のように、下層から盤石なものに積み上げていくことが、「感性」の豊かさ・鋭さ・細やかさに繋がり、ヒトを人として十分な活動へと導くものと考えている。

「感性」が豊かであればあるほど、「ヒト」から「人」へと成長し、「人」（他人）のことが自分のことのように気になる・昨日今日のことが気になるように明日のことが気になるという、いわば水平的・垂直的思考のできる「人間」となると考える。このような大人たちこそ、周囲のことに、細やかに「気付き」行動を起こす人間になっていくのであろう。

己にたくましく、人（他人）に優しい人間は、「感性」が豊かだ。上の図で示す B 型（逆三角形型）こそ、勉強を新皮質育てと勘違いしているようだ。「筋肉」の発達をおろそかにしていると、結局「感性」育てには繋がらない。

(2) 「感性」「感性教育」と誤解されやすい場面

ひと言で言えば、学習者の意識が「やらされている」「仕方なくそこに参加している」のか否かということになるろう。このような段階では、指導者が出すぎるあまり、学習者

はその分意欲が減退する。自ら進んで学ぼうとする意欲が乏しくなる。

また、感覚協働法や準感覚協働法を実施しても、感覚を刺激されないままでも、言葉巧みに言語反応や文章化が可能なタイプもいる。これが案外周囲からの評価も高く、真の学力と勘違いされている場合がある。これこそ悲劇以外の何ものでもない。言葉そのものは、あくまでも抽象的な世界の最たるモノであることを、指導者は意識しておくべきだ。

(3) 「感性教育」、教室学習の限界

これまでの教育活動で、ますます心配していることは、学校における「運動の大切さに関する意識の低さ」である。体の運動は、ヒトの感覚を最下層から安定させるために欠かすことはできず、これをおろそかにすれば、将来の大きな躓きに繋がる。

このような筋感覚刺激の無さが、「本物の学習」の低下につながり、覚えることが学習の本質と勘違いしてしまう。これこそ先に図版で示したB型人間の育成となる。

「運動」「スポーツ」「体育」することが、「もっと勉強をしたくなる」児童生徒学生の意欲づくりを応援（支援）に繋がることを、指導者はしっかりと認識しておくべきである。とは言え、ハードな運動を奨励しているわけではない。個人差を考慮したメニューが必要なことはもちろんである。

さらにもう一つの限界として、学校現場での五感刺激の場、特に味覚・触覚・嗅覚学習の場の設定が難しいことが挙げられる。小学校も高学年に入ると、現カリキュラムでは、記憶学習に偏りすぎ、五感を刺激しての授業が途端に減少してくる。脳細胞が日に日にそれも爆発的に増加しているこの機を、「感性教育」の好機と捉える教師（の授業力）・教育行施策が待たれる。

3 これからの「感性」「感性教育」「感性哲学（美学）」の在り方

学習（勉強）の本当の姿は、どうあるべきであろう。ひところ流行った「楽しい勉強」だけで良いのだろうか。そうではあるまい。本物の勉強は決して楽なものではない。楽しくないことも多い。ところが、誰しも「きつかったけど、またやりたい、続けたい、もっとやりたかった、もっと続けたかった」といった経験があるはずだ。私は、ここに本物の勉強の姿があるように思えてならない。私は、「楽しい勉強」を決して否定はしない。しかし、それよりももっと崇高な勉強の姿があるはずだ。「きつかったけど、もっとやりたい」。ここにこそ学習（勉強）本来の姿がある。

感覚を刺激し感情豊かな幼児・児童・生徒・学生を育て、ここでの学びがそれぞれの個人の中で蓄積・総合され、健康で豊かな精神を持った人づくりに繋がる。そこに「感性教育」の姿が在り意義もある。

おわりに

今になって、再びカントに浸っている。彼の言う「悟性よりも下位にある感性」の部分が気になって仕方がない⁽¹⁴⁾。果たして彼は、「感性」を人間存在の中で、このような低次元のものと捉えているのだろうか。原書ではどう書いているのだろうか、気になるところだ。気になりながらも翻訳にしか頼れない自分がもどかしい。そこで、カント自身と

勝手に会話する以外にない。「あなたは、本当にそう考えているのですか？」と。カントの時代に、脳生理学の研究が進んでいたらどういふ論文を書いたのだろう。

「あなたの言いたかったことは、もしかしたら悟性の基盤として感性があると言いたかったのではないですか？ それを劣位にあると誤訳されてしまったのでは？」と自問自答している。

「感性」「感性教育」の研究は、分析も方法論においても生半可な理論の構築では解決できない。そのためか、「感性（教育）」についての先行研究は、決して多くはないのが現状だ。しかし、人間である以上ここを避けては通れない深淵かつ創造的な世界であることは間違いない。今回もまた浅学非力なまま「感性」「感性教育」を論じたに過ぎない。未だ「感性学の周辺」を彷徨している私である。

註

- (1) 純真紀要No.57『感性学・序説』P38～P39
- (2) 2015年6月27日、九州大学で開かれた『九州教育経営学会』において、福岡市の教職員を対象にしたアンケート結果をもとに、教師の「感性教育」についての意識の低さを指摘
- (3) 「感性」「感性学」を言うと、カント・ヘーゲル・ルカーチなど、哲学的視点に立って「美」をろんじた所謂「美学（論）」を学んでいると思われる向きがある。もちろん、それも「感性（学）」の対象ではあろうが、私はここにも書いている通り、「感性」とは人間を具体的な行動に駆り出させる根本的な内的エネルギーの発信元と考えている。したがって、人間の「感性」について研究すればするほど、神羅万象人間世界の周辺の出来事が気になるのである。
- (4) ここでの「授業」とは、学校での授業のみを想定しておらず、広く意識的・無意識的を問わず、結果的に指導する者とそれを受講する者の存在があれば、これにあたる。したがって、家庭や社会での「学び」も含む。
- (5) 純真紀要No.57『感性学』序説 P41
- (6) 掌編小説・ショートショートを書かせる前段として、この感覚協働法は効果があるようだ。将来幼児期の子どもをあずかる職業をめざす学生にとって、童話の読み聞かせもしっかりと学んでほしいが、さらに自らが創り出す創作文にも興味を持ってほしいと考える。とは言え、創作となると、苦手意識が先に立ち身構える学生は少なくない。このような学生にとって、絵を見ながら同時に音楽をかけるこの方法は案外効果的のようだ。具体的な方法については、純真紀要No.57『感性学』序説 P44～P46に述べている。
- (7) ここで、ヒトには色彩聴覚タイプが居ることを知っておくべきだ。統計的なことは分かっていないが、数万人に一人は居ると聞いている。このタイプのヒトは、音(楽)を聴くと眼前に色が走る（映像的な）という。原因については、脳生理学上も未だ解明できていない。指導者側は、児童・生徒・学生の中にこのタイプが居るかもしれない、ということを知り、常に意識しておくべきだろう。

- (8) 純真高校看護専攻科『感性哲学』のシラバスには、人間が具体的な行動を起こす一つの手がかりとして、感覚の刺激（ここでは音楽）がそれを支援したり反対に抑制したりする場面が見られる。そのことを体感してほしいと、準感覚協働法による学びを採り入れている。
- (9) 純真短期大学『文章表現法』シラバスには、註（6）でも述べた通り、個々人の創作力を認め合うという視点にたったの授業として、準感覚協働法による朗読の学びを採り入れている。
- (10) 中村学園大学から講演の依頼があり、その際、準感覚協働法を採り入れた講演を行った。対象の児童教育学科3年生127名の全員が将来小学校の教師を目指していると聞き、国語学習などではこの感覚を刺激しつつ詩文の内容に浸ったり、自分なりの解釈を大切にしたりすることに繋がると考えたからである（2017年11月22日中村学園1号館大講義室にて）。
- (11) 準感覚協働法の試みは、故・石井義武が詩の朗読に音楽を重ね合わせるという方法を、授業として採り入れたことに始まる。感覚協働法も石井氏により考案された学習方法で、これが音楽+絵という方法であったのに対して、「準感覚・・・」と名付けたのは、絵の変わりに、言葉（言語）という極めて抽象的な言語世界との協働を図って感覚を刺激する学習方法だからである。戦中・戦後極めて物資が乏しい時代にあり、氏はわずかの資料で大人数でも共同学習ができるこれらの方法を次々と考案しては大学生を魅了していった。詳しくは、石井義武の遺したたった一冊の著書『勉強の仕方の研究』をご覧いただきたい。
- (12) 石井義武著『勉強の仕方の研究』P204～P206
- (13) 純真高校看護専攻科「感性哲学」のシラバスは次の通りである。

授業計画（15回の授業）

- ① オリエンテーション・「感性」の時代がやってきた（あなたの感性力は）
 - ② 「感性」についてのさまざまな研究事例を知る（感性哲学の原理）
 - ③ 義務教育期における「感性教育」の実態を知る（感性育ては可能か）
 - ④ 日本の伝統文化や芸能および言語文化（能・狂言・短歌・俳句）に表われた感性について学ぶ
 - ⑤ 絵画の世界に潜む感性を知る（感覚協働法の試み）
 - ⑥ 音楽の世界に潜む感性を知る（民謡・わらべ歌に潜む世界を知る）
 - ⑦ 人間力・コミュニケーション能力と感性との関係を知る（感性とコミュニケーション力との相関）
 - ⑧ 人権感覚と感性育てとの相関を考える（ある古典落語を分析しつつ）
 - ⑨ 幼児期における感性教育の重要性を知る（脳生理学的視点から感性を考える）
 - ⑩ 文学（主に随筆・小説）の中に表れる感性について学ぶ（芥川龍之介の語りについて）
 - ⑪ 国際化・情報化社会における感性の在り方を考える（主に映像・メディア・マスコミの態様について）
 - ⑫ 書の中に見る感性の表われを知る（「書」は人なりと言うが、それはどういうことなのか）
 - ⑬ スポーツおよび芸術と感性の表われを知る（感性の諸様相）
 - ⑭ 感性（学）の未来を考える（次時の発表に向けて、めいめいがオリジナル格言を創り解説する）
 - ⑮ まとめ（これまでの学び・私の格言・感性教育の今後、などをテーマに各自発表を行う）
- (14) デューリンク著・龍野健次郎訳『カント哲学入門』第8章「カントと芸術」第2節「判断力」P238～P242

参考文献および図書

- アーサー・D・エフランド著、岩崎由起夫訳『美術と知能と感性』日本文教出版、2011年
- 池田晶子著『考える人・西洋哲学史』中央公論社、1994年
- 井島 勉著『現代哲学双書・美学』創文社、1671年
- 井島 勉著『芸術とは何か』創文社、1979年
- 石井義武著『勉強の仕方の研究』岩波ブックセンター信山社、1985年
- 伊藤 肇著『人間学』PHP文庫、1990年
- 岩本真紀著『リスク感性に必要なコンペテンシー要素の明確化』香川県立医療大学雑誌 第5巻 p15-22、2014)
- 遠藤友麗著『感性教育のすすめ』～心と知に働く豊かな感性の育成とその理論～2001年12月号特集
- 小川仁志著『哲学の教室』中経出版、2010年
- 片岡徳雄著『子どもの感性を育む』NHKブックス603、1990年
- 片岡ハルコ著『感性と教育』三秀社、1990年
- 加藤尚武著『現代倫理学入門』講談社学術文庫、2005年
- 川原栄峰著『哲学入門以前』南窓社、1967年
- カント著『判断力批判』岩波書店・カント全集8、1999年
- カント著『純粹理性批判(上)』岩波書店・カント全集4、2001年
- 木原武一著『哲学からのメッセージ』新潮選書、1999年
- 桐田敬介著『感性を働かせながら』日本美術教育学会、2010年
- 倉戸ツギオ著『体験学習と感性教育』明治図書出版、2001年
- 桑子敏雄著『感性の哲学』NHKブックス914、2001年
- 古閑博美著『ホスピタリティとEQ』嘉悦大学研究論集第46巻第2号通巻84号、2004年
- 酒井一郎著『ホリスティック感性教育によるコミュニティビジネス実践論』田園調布学園大学2005年 p69-91
- 坂口光一著『リベラルアーツ講座「感性・こころ」』亜紀書房、2008年
- 佐々木健一著『日本的感性』中公新書2072、2010年
- 高橋昌一郎著『感性の限界』講談社現代新書2153、
- 竹内敏雄編『美学辞典』弘文社、1974年
- 都甲 潔・坂口光一編『感性の科学』～心理と技術の融合～朝倉書店、2006年
- ゲーリンク著『カント哲学入門』以文社、1971年
- 中川弘泰著『感性を育てる教育』信州教育出版社、2013年
- 中谷彰宏著『大学時代にしておく50のこと』ダイヤモンド社、1997年
- 樋口聡著『身体教育の思想』勁草書房、2005年
- 牧野昇・高尾建次・松浦洋子共著『知性・感性・邪性』東洋経済新報社、1997年